

1 イスラエルの神

この九月から、旧約聖書、創世記によつて、イスラエルの父祖の歴史を改めて取り上げています。イサクとヤコブです。

聖書で、旧約から新約までずっと使われている重要な表現の一つに「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」というのがあります。

一般に「神」という言葉は聖書の神だけでなく、それ以外の神、神々も表します。普通名詞です。それを使って聖書も聖書の神を表しているわけですが、それだけで十分でないことは言うまでもありません。聖書自身が聖書の神を、いろいろに呼んでいます。その一つ、もつとも重要な呼び方、それが「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」です。

この「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」という呼び方が定着するのは当然ながら歴史的にはヤコブ以後で、聖書を見ると、モーセのときです（出エジプト三章）。以来イエス・キリストの時代に至るまで、イスラエルの人々は、アブラハム、イサク、ヤコブ、これら父祖たちの神を、自らの神とし、その民であることを、誇りとしてきたのです。

この「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」という言葉で、キリスト教の歴史上有名なのは、パスカル(1623-62)の回心です。パスカルはフランスの天才数学者にしてキリスト教思想家、『パンセ』（随想録）という書物を書いた人です。ご存じの方も多いと思います。

一家はもともとはカトリックでしたが、三一歳のとき(1654)、彼は決定的回心と言われるものを経験します。この時のことを紙片と羊皮紙に記し胴衣の裏に縫い付けていて、死後発見されます。

その中に、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神にして、哲学者、識者の神にあらず・・・イエス・キリストの神・・・」という有名な言葉が出て来ます。当時パスカルはカトリック改革運動の一つの中心でもあったパリ郊外、ポール・ロワイアル（女子）修道院と関わり、オランダのヤンセニウスという人の影響を受けていたといわれます。この人はカトリック当局によつて著作が発禁処分を受けるなど、プロテスタントのカルヴァンの考えにも近く、人間の罪と墮落を言いつつ神の恵みを強調していたのです。その意味では、パスカルの遺した言葉は、彼の恩寵体験を記したものであったのです。

さてイエス・キリストにとつても、神とは、このイスラエルの神、すなわち、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」以外ではありませんでした。この神をイエスは「わたしの神」と呼んだのです。

しかしわたしに「わたしの神」と呼んだだけではありませんでした。イエスは「わたしの父」とも呼んだのです（ヨハネ二〇・一七）。それは、このアブラハムから、イサク、ヤコブをへて始まった救いの歴史に、ご自身が、特別の関わりをもっている

の自覚を示しています。御子として、メシアとして、その自覚をもって、生涯を送っておられたということです。神の救いの歴史は、こうしてイスラエルの父祖アブラハムの祝福から始まり、長い歴史を通過し、御子イエスの御業によって目標に達し、聖霊の時代の画期を迎えることになったのです。

2 寄留者として

神の救いの歴史、その始まり、父祖の歴史を、私ども学んでいます。今日は創世記二六章、イサクです。イサクの死を伝えているのは三五章ですので、形の上ではそこまでがイサク物語となります。ただ中身は、ほとんどヤコブに関わる話で、イサクが単独で出てくるのはじつは今日の箇所だけです。

たしかにイスラエルの神は「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」です。しかし、実際のところ、いわば創業者アブラハムの働きは、イサクを飛び越してヤコブに受け継がれて発展していきます。イサクは、アブラハムとヤコブの間にあつてむしろ目立たない存在です。しかし、いうまでもなく、彼がいなければ、神の祝福、その救いの業は伝えられなかったのです。

さて今日の箇所を読むための大きな前提を最初に確認しておきます。一つは、時間軸です。イサクが何歳の頃の話かということ。はっきりは分かりませんが、少なくとも父アブラハムから家督を継ぎ、族長として一族を率いてからです。イサクにエサウとヤコブが生まれたのが六〇歳のときです。そのときアブラハムはまだ生きていました。アブラハムはそれから一五年生きて一七五歳で亡くなります。アブラハムがまだ生きていたか、すでにいなかったか別として、イサクはいま一族の長として責任ある歩みをなしつつあります。

もう一つは、場所です。イサクが活動したのは基本的にパレスチナ南部です。「この地方にまた飢饉があつたので」（一節）とはじめにあります。「この地方」とは「ベエル・ラハイ・ロイの近く」（二五・一一）だと思われます。父アブラハムの死んだあと、イサクはそこで暮らしています。

ゲラルという町もここに出て来ます。ベエル・ラハイ・ロイからさらに北に位置しています。ペリシテ人の町でその王がアビメレクです。飢饉を逃れ、イサクは神のお告げにしたがってその町に住みます（六節）。さらに、ベエル・シェバという町も出てきます。アブラハムと関係の深い場所で（二一・三三）、パレスチナ南部ほぼ中央にあるオアシス町です。ゲラルの東です。

それと関連して、注意しておきたいのは、イサクらの生活様式です。基本的に「天幕」（一七節）生活ですが、常時移動していたのではなくて、時々、土地に住み着いて農業をおこなっていたのです。半分牧畜、半分農耕、一般に「半遊牧民」と称される生活です。それを今日の箇所は典型的に示しています。一二節以下を見ると農耕生活をしています。一五節以下の井戸をめぐる争いは、羊飼同士の争いで、牧畜が主たる生活だったことが分かります。

いま言ったことと関連して、改めて私ども確認しておかなければならないのは、彼らが、「寄留」（三節）の民として生活していたことです。自分の土地をもっている

わけではありません。他と無関係にも暮らせる生活ではありません。彼らは、他国に寄留し、日常的に、他の民族と隣り合って暮らしていたのです。色んな軋轢と無縁でないのです。

今日の箇所は、かなり長いので、全部を取り上げることではできません。いま言ったような寄留者という観点から、族長イサクの生活、あるいは彼の考え方、その行動など見てみたいと思います。

さて、今日の箇所、大きく三つの出来事が記されています。順番に、簡単に見て行きます。

はじめに一〜一四節です。飢饉があつて、イサクは、エジプトには下るなという神の命令に従つて、ゲラルに住みます。イサクのこれからの生活を考える上で、重要なのは、次のような神の言葉です。

そのとき、主がイサクに現れて言われた。「エジプトへ下つてはならない。わたしが命じる土地に滞在しなさい。あなたがこの土地に寄留するならば、わたしはあなたと共にいてあなたを祝福し、これらの土地をすべてあなたとその子孫に与え、あなたの父アブラハムに誓つたわたしの誓いを成就する・・・」(二〜三節)。

簡単にいえば、エジプトに下るな、むしろ寄留者として生きろということです。エジプトというのは、豊かな大国です。多くの民族が避難したところですが、アブラハムも逃れたことがあります(一二・一〇以下)。

アブラハム物語で、アブラハムの甥ロトと別れる際に、ロトが、水の潤うヨルダンの低地を選ぶところがあります。あそこにこんな言葉がありました。「主の園のように、エジプトの国のように、見渡す限りよく潤っていた」(一三・一〇)。文明国エジプトは、食料はたくさんあつても、宗教的にも、生活の上でも、きわめて誘惑の多いところであつたのです(一二・一〇以下)。

こうしてイサクは、エジプトの豊かさを知りながら、神の命令に従つて、困難な道を、寄留者としての道を歩むのです。これが彼の人生を形作ります。そしてこの困難な道の歩みを神は守つてくださった。「主の祝福」(一二節)を豊かに与えてくださったのでした。

3 イサクの平和主義

二つ目の出来事は、一五〜二五節です。井戸をめぐる争いです。牧畜を営む上で水が最も重要です。自然のオアシスがなければ、井戸を掘らなければならない。青草が生えてはじめて家畜を飼うことができるのです。

この箇所についても、全部を取り上げることではできません。ここではイサクの行動に注目してみましょう。

ここに伝えられているところによれば、そこには、昔アブラハムが掘った井戸がたくさんあつたようです。ところが、イサクが豊かになつたことを「ねたんで」(一四節)、ペリシテ人が土で埋めてしまった。挙げ句の果てに、アビメレクは、ここから

出て行くように要求したのです。さてイサクの対応です。

イサクはそこを去って、ゲラルの谷に天幕を張って住んだ（一七節）。

イサクはアビメレクの求めに逆らうことはしませんでした。それが寄留者として生きるということです。

イサクは、おそらく条件の悪い「谷」のほうへ移動して、かつてアブラハムが掘った井戸を掘り起こします。しかし井戸を掘り当てるかゲラル人がやってきては、この水は我々のものだといって水争いが生じたのです。けれどもイサクは争うことはしませんでした。なるほどアビメレクとイサクの羊飼いたちの間で諍いは生じます。しかしそれが本格的な争いになった様子はありません。「イサクはそこから移って」（二二節）という言葉が、その秘密を明らかにしています。イサクは争いを避け、他の場所に移って、井戸を掘りつづけたのです。

三つ目、最後の出来事、二六〜二三節です。アビメレクが来て、イサクに契約締約を申し込むところです。イサクは尋ねます。

イサクは彼らに尋ねた。「あなたたちは、わたしを憎んで追い出したのに、なぜここに来たのですか」。彼らは答えた。「主があなたと共におられることがよく分かったからです。そこで考えたのですが、我々はお互いに、つまり、我々とあなたとの間で誓約を交わし、あなたと契約を結びたいのです。以前、我々はあなたに何ら危害を加えず、むしろあなたのためになるよう計り、あなたを無事に送り出しました。そのようにあなたも、我々にいかなる害も与えないでください。あなたは確かに、主に祝福された方です」（二六〜二九節）。

イサクはアビメレクの申し出を受け入れ、契約の食事をもって、相互に害を加えないという約束を取り交わします。一人の寄留の民にすぎないイサクは、しかし土地の人の尊敬を受けるようになっていました。契約を結び、恒常的な平和な関係に生きはじめたのです。「寄留するならば、わたしはあなたと共にいてあなたを祝福」するという神の言葉は真実だったのです。

さてはじめに申し上げた、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、この中でアブラハム、そしてヤコブといったきわめて個人的な人格のあいだで、イサクは何か目立たない存在であるかのように私どもは言ってきました。

しかしこうして辿ってみると、一見消極的に見えるイサクの、何といたらいいでしようか、その平和主義、それが私どもに印象深く迫ってきます。その背景に深い信仰と従順があったことはいまでもありません。

このようなイサクを、アブラハムの神は祝福し、神の救いの歴史の中に生かし用いてくださったのです。このことは、私ども、まことに感謝をもって聞かなければならないことなのではないでしょうか。私どもみな何の変哲もない人間です。決して能力に長けているわけでも、个性的でもない、信仰も小さい。でも神は、イサクを愛したように、イサクを祝福されたように、私どもを愛し祝福し、神の救いのために生かし用いてくださるのです。

（二〇二二年九月一日）